家族ソーシャルワークにおけるエンパワーメント・アプローチ その(1)

―エンパワーメント概念とソリューション・フォーカスト・アプローチ―

Empowerment Approach for Family Social Work part 1

― The Empowerment Concept and Solution Focused Approach ―

安達　映子 *
Eiko Adachi

はじめに

近年，様々な領域においてエンパワーメントという用語を目にするようになった．ことにソーシャルワークの分野では，すでに重要な鍵概念の１つとみなされており，ソーシャルワークが，エンパワーメントを志向ないし前提とするものでなくてはならないというのは，ほぼ共有された認識の１つとなってきている[1]．

だが，ソーシャルワーク実践において，クライエントをエンパワーするとは具体的にどういうことなのか，ことにソーシャル・ケース・ワークにかかわる実際的な援助技法という観点からの検討については，まだ十分に展開されているとはいいがたい．エンパワーメントを実現するために，援助者／ソーシャルワーカーはどのように働きかけることができるのか，また必要なのかということについての議論は，今後の課題として積み残されているのが現状であろう．

本稿では，エンパワーメントという概念について技法論の観点から必要な部分を検討し，家族ソーシャルワークにおいてそれを実現する手法として，ソリューション・フォーカスト・アプローチに着目する．別稿において取り上げるこのアプローチによる援助事例と合わせて，エンパワーメント技法としてのソリューション・フォーカスト・アプローチの有効性と課題について考えたい．

１．エンパワーメント概念とソーシャルワーク

(1)　エンパワーメントとは何か

ソーシャルワークにおいてエンパワーメントという用語がどのようなかたちで登場し，位置づけられてきたか，またその定義についてはすでに論考がなされている[2]．ここでは，援助技法としての具体化という観点からポイントになる点を取り上げることを中心に，エンパワーメントの意味について確認しておきたい．

ソーシャルワークの範疇ではじめてエンパワーメントということばを取り上げたのは，周知の通りソロモン（B.B.Solomon）である[3]．彼女はその著作の中でいくつかのかたちでエンパワーメントという用語に言及しており，例えばつぎのような説明が加えられている．

「エンパワーメントとは，スティグマを付与された集団のメンバーであることによりもたらされた否定的な評価によって引き起こされた力の欠如する状態（powerlessness）を減じてい

* 社会福祉学専攻

くことを目的に，クライエントまたはクライエント・システムに対応する一連の活動に，ソーシャルワーカーがいかに関わっていくかという過程のことである.」

このような定義付けにもすでに示されているように，ソーシャルワークにおけるエンパワーメントという語の使用は，個人のレベルから集団ないし社会全体のレベルにまで波及するものである．カウガー（S.D.Cowger）はこの点について整理しており[4]，エンパワーメントを個人的エンパワーメント・ダイナミクスと社会的エンパワーメント・ダイナミクスに分けて扱っている．前者は，クライエントが援助過程の中でいかに主体として力を発揮し方向を決定していけるかという観点を示しており，後者は社会状況に規定される個人の行動という視点から，資源と機会の提供の問題を論じる観点となっている．

本稿では，エンパワーメントという用語が，この2つの側面をもつものであることを前提としつつも，ソーシャル・ケースワークないし家族ソーシャル・ワークにおける主体としてのクライエントまたはクライエント家族の決定とその実現を支える援助手法の検討を意図している．従って，カウガーの分類にならえば，個人的エンパワーメント・ダイナミクスを主に想定しながら，そのための有効な方法を探索していくことになる．

ソロモン以降も，エンパワーメントという用語については多くの説明や定義付けがなされてきた．だが，その過程で意味が明瞭になるというよりも，むしろあいまいさの残る，重層的で多義的な概念であることが浮き彫りにされてきたといえるだろう．

この用語の辞書的意味は，おおむね①力，権利（権限）を与える，②可能にする，できるようにするということになる．エンパワーメントがしばしば「力の獲得」とか「力の賦与」というかたちで説明されるのも，原義からすればさほど的はずれなことではない．ソロモンの定義においても，力を発揮できない状況におかれた人々が，その状況を通して，力を取り戻したり強められたりする過程であることが，示されていた．

しかし，この用語を単純に「力の獲得」や「力の賦与」という観点を強調して理解することは，ソーシャル・ワークにとって落とし穴となるような点を含んでいる．

なぜなら，「力の獲得」や「力の賦与」というとき，そこには「力を与えられなければならない存在」，つまり無力なもの，弱者としての受け手が想定されることになり，同時に力を与えるもの（援助者／ソーシャルワーカー）と与えられるもの（クライエント）という関係性が規定されてしまうからである．安易にいえば，力の少ない（足りない）クライエントに力を与えるのがソーシャルワーカーであったり，ソーシャルワークという過程であるかのような誤解を導きかねない．

しかし，エンパワーメントということばの最も意義深い視点は，すべての人に「すでに力がある」という前提にたつことである．

むろんこれまでなされてきたエンパワーメントに対する定義付けが，そのことを十分にふまえてこなかったわけではない．豊川は，エンパワーメントの定義に含まれる共通の意味あいとして，次の2点を指摘している[5]．

(1)誰もが有能さを備えており，かつその有能さを示す可能性をもっている
(2)個人が自らの有能さを示せないのは，その個人に有能さが欠けているからではなく，社会のシステムが有能さを示す機会を個人に提供できないからである．

ここに示されているように，エンパワーメントにおける「力の獲得」とは，欠けているものを得る，今足りないものを増やすということではなく，あくまですでにある力，有能さを認め，その本来あるものを十全に発揮するということである．だが，森田も問題視するように[6]，力

のないものが力をつけるという論調ないしは発想が，この用語の使用をめぐってみとめられがちなのも事実での一端なのである．

このような状況を理解した上で，エンパワーメントとソーシャルワークの関係において強調したいのは以下の点である．

ソーシャルワークはクライエントをエンパワーするものではなくてはならない．そのエンパワーメントとは，新しい力の獲得というよりは，すでにある力や有能さの再発見・再認識と現実化・実行化であり，それをサポートするのがソーシャルワークの重要な役割だ，ということである．

そのサポートの実際的な手法の検討が本稿の目的であり，このような視点にたつとき，その有効な技法の1つとして，ソリューション・フォーカスト・アプローチが注目されるのである．

2．ソリューション・フォーカスト・アプローチとエンパワーメント

(1) ソリューション・フォーカスト・アプローチの基本的な考え方

ソリューション・フォーカスト・アプローチとは，コミュニケーション派家族両方の1つの発展型としての短期療法において，現在，最も注目されている手法，志向を総称したものである．短期療法の展開についてはすでに他で論じてきたので[7]，以下ではこのアプローチの中心を担ってきたBFTC（Brief Family Therapy Center）の基盤となる考え方と具体的な手法について提示しながら，すべての人は有能さを備えている，というエンパワーメント概念のエッセンスを基底に据えた援助技法として，その有効性を探ってみたい．

ソリューション・フォーカスト・アプローチの背景にある特徴的な考え方の1つは，「すべてのクライエントはその問題を解決するのに必要なリソース（資源）と強さを持っており，自分たちにとって何が良いことなのかをよく知っていて，彼らなりに精一杯やっているのだ」[8]ということである．このアプローチでは，この信念が強く貫かれているために，クライエントがすでに持っている能力や背景，「問題」とならない状態，が常に注目され，活用されている．ソリューション・フォーカスト・アプローチ＝解決に焦点を当てたアプローチでいう解決とは，むろん問題が解決された状態ということであるが，この名称にアプローチの志向は幾重にも象徴されている．

従来対人援助という行為には，クライエントが抱える何らかの「問題」を取り除き，状況を改善するという思考が当然のごとく存在した．そのため援助者はどうしてもクライエントの問題，ないしはできないこと，欠けているものに目を向け，それをなんとかしようという努力を援助と勘違いすることになる．

もともと「問題の原因は何か」「誰が悪いのか」を問わないというのは，家族療法が共有するシステッミクな発想である．だが，ソリューション・フォーカスト・アプローチではそれをさらに押し進め，問題に執着することもやめてしまう．ここで着目されるのは，クライエントがどうなりたいかということ，つまり「解決（した状態）」であり，そのための方法もそれを実現する力も，すべてクライエントがすでにもっているということが徹底して強調される．そして，ここでの援助とは，クライエントとの相互交渉の中で，「ドミノ倒しで最初のドミノを軽くさわるような役割を果たす」[9]ようなかたちで，力の発見を助け，それを拡大していくことなのである．

(2) ソリューション・フォーカスト・アプローチの技法

以上のような発想は，具体的にはどのように援助実践の中で展開されるのだろうか．ソリューション・フォーカスト・アプローチでは，丁寧な援助過程のステップが整えられている．ここでは，解決を志向するということ，またクライエントのすでにある力の活用ということが，実際にはどのように行われるのかがわかりやすい，

特徴的な質問の仕方をみてみよう[10].

◎「問題が起こっていないときは…？」＝例外（exception）の発見

これは「問題が起こっていないときは，何が起きているのか？」ということを，クライエント（家族）に問いかけていくものである．援助者の前に現れる家族の多くは，何らかの「問題」を抱え，それに対処しきれないという「現実」が，生活全般を脅かしているような状況にある．だが，どのような困難にも，「いくぶんましだったとき」や「なんとか対処できたとき」，すなわち「例外」が必ずあるものである．援助者は，この「例外」の時のクライエント（家族）の行動を具体的に丁寧に聞いていく．そしてその「例外」の記述をテコに，どうすればクライエント（家族）が再び「例外」を起こせるのかを探り，また「例外」が例外ではなく通常の状態（＝問題解決）になるべく，介入をすすめていくことができる．

しかし，この質問の何より重要な点は，「自分（たち）が，問題解決のために有効なことを，すでに遂行している」ということをクライエント（家族）に知らしめるという効果である．「問題というものはいつも起きているわけではなく，ある時は起きていてあるときは起きていないという単純な事実」の掘り越こしが，自分らの力や，有能さについての認識を異なったものとしていくのである．

◎「ある夜奇跡が起こって…」＝ミラクル・クエスチョン（miracle question）

「ちょっと想像していただきたいのですが，ある夜奇跡が起こって，眠っている間にあなた（がた）の問題が解決したとします．あなたは次の朝，奇跡が起こったということをどのようにして知りますか？どんな違いに気づくでしょうか？」という問いかけがミラクル・クエスチョンと呼ばれるものである．このことを，クライエントまたはその家族それぞれについて，行動レベルで記述してもらう．「奇跡が起こって問題が解決していたとしたら，おとうさんはどんな違った行動をとっているでしょうか？」「おかあさんは，息子さんのどんな行動を見て，奇跡が起こったことを知るでしょうか？」という具合である．

この質問の意図も，基本的には「例外」の発見と同じである．課題はこうした「奇跡後」のこととして語られる行動を実際に開始させることであり，そのための介入の糸口をクライエント（家族）の記述から得ようとするものである．そして，ここでも大切なのは，たとえ「奇跡後」という特異な限定付きではあっても，問題が解決した状態について語り合うという過程そのものが，変化への期待を生みだし，そのために内在する力に目を向けさせるということなのである．

ソリューション・フォーカスト・アプローチには，この他にも工夫をこらした質問様式がいくつかある．いずれにも共通する発想は，解決という未来を志向しながら，それを達成する方法とクライエントの中に現在すでにあるということを徹底させていることである．問題解決のために，何か別の新しい力をつけるのでも，ましてや援助者によってそれを与えられるのでもなく，すでにあるものを上手に引き出そう，十分に使っていこうという働きかけを，質問というかたちで実行していく．

「問題」に悩むクライエントにとって苦痛なのは，問題自体に加えて，それをどうすることもできないという無力感，絶望感である．このとき，内在する力の認識は，そのまま自己肯定の強化となり，力の増大につながっていく．相互交渉，コミュニケーションを通してその良い循環を支えていこうとするのがこのアプローチであり，それはそのままクライエントをエンパワーしていく過程にほかならないのである．

注

1）小松源助（1995）「ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの実際」ソーシャルワーク研究82号相川書房

2）久保美紀（1995）「ソーシャルワークにおけるEnpowerment 概念の検討－Powerとの関連を中心に」／中村佐織（1995）「ソーシャルワークにおけるエンパワーメントの意味－アセスメントとのかかわりから－」以上ソーシャルワーク研究82号　相川書房，など

3）Solomon,B,B.（1976）Black enpowerment: Social work in opressed communities. Columbia Univeresity Press.

4）Cowger, C. D.（1994）Asessing Client Strengths: Clinical Assesment for Client Enpowerment. Social Work Vol.39, №13

5）豊川輝（1995）「関係向上のための夫婦・家族療法－エンパワーメントに基づく統合的スキル訓練アプローチ－」家族心理学研究　第9巻　第2号

6）森田ゆり（1998）「エンパワメントと人権」開放出版社

7）安達映子（1995）「コンテクスト構成としてのコミュニケーション・プロセス－現実再構成過程としての援助面接－」，同（1996）「夫婦面接における短期療法の試み」心理臨床学研究　Vol.13. №4など

8）Insoo Kim Berg, Scott D. Miller（1992）Working With the Problem Drinker: A Solution-focused Approac,W.W.Norton. 斉藤学監訳（1995）「飲酒問題とその解決　ソリューション・フォーカスト・アプローチ」金剛出版

9）Insoo Kim Berg（1994）FAMILY BASED SERVICES: A Solution-Focused Approach, W.W.Norton. 磯貝希久子監訳（1997）「家族支援ハンドブック」金剛出版

10）Brief Family Therapy Center（1992），Insookimberg ワークショップ資料